

長の高橋俊毅先生と福井総合病院院長の勝尾信一先生に座長をお願いし、「クリティカルパスと病院運営〜クリティカルパスを正しく理解し、病院運営に役立てよう〜」を開催しました。

今、全国的に取り組みが始まっている「アドバンス・ケア・プランニング エンドオブライフ・ディスカッション」も患者が望まない医療は行わない点では働き方改革に関係します。国立長寿医療研究センター在宅連携医療部長の三浦久幸先生と、愛知県看護協会会長の鈴木正子先生に座長をお願いし、シンポジウムを開催しました。ここでは国立長寿医療研究センター名誉総長の大島伸一先生に今後の取り組み方に関して成果を計る基準をしっかりと決めて取り組むことが重要との特別発言をいただきました。

今回の学術総会では、新しい取り組みとして、一般演題の中でも同じ目的の演題を集め、十分にディスカッションがなされる事を目的に、ミニシンポジウムを開催しました。新たな試みであったため、演題の取りまとめなど座長の先生方にはご迷惑をおかけしたかも知れませんが、「医療安全管理者の業務における課題と養成研修のあり方」、「多職種で考えるポリファーマシー」、「ダイバーシティの課題と展望」、「画像診断報告書の確認漏れ対策」、「集患と求人につながる病院広報」という題で、5つのセッションを開催することが出来ました。

一般演題にも790題ほどの興味ある演題の応募がありました。紙面の都合で触れることができません。学術総会の抄録集をご参照願います。

今回の学術総会は、観光地として人気が無いといわれている名古屋での開催でした。前年の猛暑のこともあり、この時期に多くの関係者にご参加いただけるか主催者としては心配しておりましたが、4500名余の参加をいただきました。これは、医療の現場では誰もが「働き方改革」を模索しており、何か情報を得るためにご参集いただいたものと理解しております。このような暑い時期に開催される学術総会への参加に興味を引くために、今回は、1日目の懇親会を名古屋港水族館で開催しました。しかし予想を上回る事前登録をいただき、当日の参加希望にお応えできず申し訳ありませんでした。イルカショーの終了後、河村 たかし名古屋市長に乾杯の音頭を取っていただきました。市長は、名古屋弁を前面に出す事で全国に有名ですが、地元ではワクチン行政や癌検診で先駆的な取り組みを行っており、参加者はその持論を興味深く拝聴することとなりました。

閉会式を前に優秀演題の表彰を行いました。全部で20演題が選出されました。査読および選出をお引き受けいただきました学会会員の皆様に御礼申し上げます。

最優秀演題は、社会福祉法人恩賜財団済生会済生会保健・医療・福祉総合研究所の山口直人先生による「済生会医師の働き方の現状と今後の在り方に関する研究」でした。私から直接表彰状をお渡しし、演者には感想をお聞きしました。

閉会式後の市民公開講座では国立病院機構東京医療センター総合内科部長の本田 美和子先生に「やさしさを届けるケア技術ユマニチュード」と題した講演をお願いしました。認知症患者を一人の大人として認め、同じ目線に立ち対等なヒトとして扱うことで、意志の疎通が図れるというこの技術は、すべての医療者そして高齢化の進む社会で、一般市民も理解すべきものと納得いたしました。

宮崎理事長および学会本部の方々には今回の学術総会開催に向けて大変お世話になりました。学会役員の方々、さらには、私が親しくさせていただいている先生方にも、プログラム編成や重要講演、シンポジウムの司会などお世話になり、本当に有り難うございました。また、忙しい中、大きな学術総会の開催に取り組み私を献身的に支えてくれたJCHO中京病院の職員にも深く感謝いたします。

来年の第22回日本医療マネジメント学会学術総会は、済生会滋賀県病院の三木恒治院長を会長として京都で開催されます。また、学会会員のみなさまと京都でお会いできることを楽しみにしております。

学会賞を受賞して

公益社団法人鹿児島共済会南風病院医療安全管理室
齋藤潤栄

この度は、学会賞という荣誉ある賞をいただき、本学会の宮崎久義理事長ならびに関係者の皆様に心から御礼申し上げます。私どもの論文は「歯科・口腔外科の標榜のない病院における歯科衛生士を中心とした口腔管理体制の構築」という題目でした。この論文は、患者のQOL向上や口腔ケアの質の向上には、歯科の専門知識を持つ歯科衛生士の直接的な介入と歯科医療機関との連携が必要と考え活動してきたことをまとめたものです。現在、これらの口腔管理体制は病院内で定着し、さらに発展した形で展開しています。今回、活動内容を論文という形でまとめ、発表することが歯科医のいない施設でも取り組み



会場風景